『千五百番歌合』における藤原良経の判詞「寒蝉自本秋天物」の意図をめぐって

黄　一丁

はじめに

建仁三（一二〇三）年始めに成立したと推定されている『千五百番歌合』の夏三及び秋一の部立には、藤原良経による絶句の詩の形を持つ判詞が存在する。これは従来和文で書かれてきた歌合判詞において極めて独創的な形式である。

漢詩で和歌を判じようとすれば、歌語を漢語表現に翻訳することになる。ある歌語に宛てられた判詞中の詩語から、良経のその歌語に対する理解を窺うことのできる場合がある。良経による漢詩判詞に次の例がある。

五百番

左勝　公経卿

かはづなくはすの下葉のさゞ浪に浮草わくる夕暮れの風

右　丹後

わかるればこれも名残のおしき哉夏のかぎりの日ぐらしの声

寒蝉自本秋天物　送夏何因欲惜声

（寒蝉本より秋天の物なれば　夏を送りて何に因りてか声を惜しまむと欲する）(一)

五百番の二首は、夏三の部立の歌であり、いずれも晩夏の情景を詠っている。良経による一聯の判詞は、右の丹後歌を批判し、それを負けとした理由を説明しており、左の公経歌には触れていない。丹後歌の歌意は、「夏と別れるので、この声も名残惜しいのだろうか。夏の終焉のひぐらしの声は」と理解すれば大過はなかろう。夏の終わりに「ひぐらし」の声を惜しむと詠むのは、丹後がこの歌では「ひぐらし」の声を秋になれば鳴かなくなるものと認識していたからであろう。しかしながら、良経は、丹後歌に対して、「寒蝉はもとより秋の物なのだから、夏を送る日にどうしてその鳴き声を惜しむことがあるだろうか」と批判する。

ここで先ず「寒蝉」という語彙に注目する。管見の限り、和歌関係の文献では、良経の判詞以外の「寒蝉」の用例は、群書類聚本系統『金槐集』における一八九番歌の題にしか見られない(二)。また、その和らげだと考えられる「寒き蝉」も和歌で

は一例しか見当たらない(三)。従って、「寒蝉」は和歌の世界では耳遠い表現だと言える。それに対して、「寒蝉」は漢文学ではよく使われる。中国側の早い用例は『礼記』に既に見られ、日本漢文学での初見も『懐風藻』に既にある。良経は漢文学から「寒蝉」を借用し、和歌の判詞で用いたと推測できる。

ここで生じる疑問は、良経が「ひぐらし」を「寒蝉」と考えた理由である。

「ひぐらし」の漢字表記である「蜩」は、『爾雅』の「釈虫」の疏では、「蝉」の異名と述べられている(四)。更に、日本側の資料を見ると、『新撰字鏡』の「蝉」条に「蜩也、世比」という記述が存在する(五)。従って、「蜩」は「蝉」と同じもの或いは近似するものだと考えてよい。

また、『和名類聚抄』を繙けば、「茅蜩」条に「(前略)比久良之、(中略)小青蝉」とあり、「ひぐらし」は小さい青色の蝉であることが分かる。そして、「寒蝉」条にある「似蝉而青者」という記述から(六)、「寒蝉」は、青色の蝉に近似するものであることが分かる。「ひぐらし」と「寒蝉」とは、外見において近いものなのだろう。

以上の資料の記述から、詩語の「寒蝉」が歌語の「ひぐらし」と対応することは想像できないわけではないが、その対応関係を明言するのは良経より時代の下る元亀二(一五七二)年京大本『運歩色葉集』である。その中に、

寒蝉(ひぐらし)(七)

との記載が存在する。このような表記は江戸時代の『書言字考節用集』などにも継承される。また、『角川古語大辞典』・『古語大鑑』などの現代古語辞書の「寒蝉」条にも「ひぐらし」との解釈が見られる。

いずれにせよ、良経の判詞にある「寒蝉」が丹後歌の「ひぐらし」を指すことは確実である。つまり、和漢兼作の文人である彼は「ひぐらし」が漢語では「寒蝉」にあたるという認識を持っていたことになる。ならば、良経は「ひぐらし」を詩語の「寒蝉」と等しく、もとより秋のものだと主張していることになる。どうやら詠者の丹後と判者の良経とは、歌語「ひぐらし」の詠まれる季節に関して何故か違う見解を持っているらしい。

本稿では、先ず詩語「寒蝉」と歌語「ひぐらし」の季節を確認し、その後、良経と丹後との間に「ひぐらし」の歌語の季節を巡って相違の生じた理由を解明することを試みて考察を行い、最後に良経による判詞の意図を推測する。

一　「寒蝉自本秋天物」の根拠

本章では、良経が判詞で「寒蝉自本秋天物」と主張する根拠を、詩語「寒蝉」と歌語「ひぐらし」の詠まれ方から確認する。

1　詩語「寒蝉」の季節について
――良経判詞の根拠　其の一――

本節では、詩語「寒蝉」の季節を確認する。

中国古典文学では、寒蝉の季節を直接的に説明するのは、『礼記』月令における記述である。

孟秋之月、(中略)涼風至、白露降、寒蝉鳴(八)。

時代の下る文学作品を確認しても、「寒蝉」の季節は『礼記』の記述と合致し、秋のものとして詩に詠まれている。日本でも広く流布し、良経も目にした可能性の高い『文選』『白氏文集』より用例を掲げる。

秋風発微涼、寒蝉鳴我側。（『文選』巻二四　曹子建「贈白馬王彪」）

碧樹未揺落、寒蝉始悲鳴。（『白氏文集』巻六三「酬牛相公宮城早秋寓言見示兼呈夢得時夢得有疾」）(九)

以上のように、中国古典文学における「寒蝉」は疑いなく秋のものである。では、日本漢文学の場合はどうか。以下、良経の時代までの「寒蝉」の用例を掲げる。

玄燕翔已返、寒蝉嘯且驚。（『懐風藻』　紀古麻呂「五言秋宴得声清驚情四字　一首」　二三）

寒蝉唱而柳葉飄、霜雁度而蘆花落。（同　山田史三方「五言秋日於長王宅宴新羅客　一首並序」　五二）

寒蝉鳴葉後、朔雁度雲前。（同　下毛野虫麻呂「五言秋日於長王宅宴新羅客　一首並序賦得前字」　六五）

樹聴寒蝉断、雲征遠雁通。（『凌雲集』　嵯峨天皇「重陽節神泉宛賜宴群臣、勒空通風同」　四）

寒蝉驚爽序、晩虎嘯涼風。（『田氏家集』　「秋風詞」題中韻　一三）

黄落相催、八月之寒蝉満耳。（『本朝文粋』　紀斉名「落葉賦以秋風四起灑落有声為韻」　八）(十)

日本漢文学では、「寒蝉」の用例は、上代の『懐風藻』から平安中期の『本朝文粋』まで見られる。用例に挙げた漢詩の季節は、傍線部からいずれも秋だと判断できる。従って、日本漢文学においても、「寒蝉」は中国古典文学と同様、秋の詩語であったと言える。残念ながら、良経による「寒蝉」の用例は当該判詞以外には現存しない。また、現存する良経と同時代の漢詩にも、「寒蝉」の用例は見当たらない。しかしながら、漢詩に精通する彼は、中国古典文学と日本漢詩文における「寒蝉」の詠まれ方を熟知していたであろう。

以上から、良経の判詞における「寒蝉はもとより秋のものである」という認識は、中国文学や日本漢詩における実際の詠法に裏付けられていることがわかる。

2　『万葉集』から『堀河百首』までの歌語「ひぐらし」の季節
――良経判詞の根拠　其の二――

前節では詩語「寒蝉」の季節は秋であることを検証したが、

良経の判詞の「寒蝉」は丹後歌の「ひぐらし」を漢訳したものであるから、良経は「ひぐらし」はもとより秋の歌語であると主張していることになる。その真偽を検証するため、本節では歌語「ひぐらし」の季節について確認する。

歌語「ひぐらし」の詠まれ方は、主に夏に詠まれる「せみ」とは異なっている。柳澤良一氏は『歌ことば歌枕大辞典』蜩条で、以下のように述べている。

『万葉集』では、夏と秋の両方の部に入っている。『古今集』以後は、単に「蝉」とあれば、その羽の薄さを夏の衣服にたとえて詠まれることが多く、夏の季節のもの、一方、「ひぐらし」は秋のものとして扱われることが多いが、『金葉集』以降は夏の部にも入っている。ただしその場合は、夏なのに秋の涼しさの趣をもつものとして詠まれる(十一)。

柳澤氏が『古今集』以後『金葉集』までは「秋のものとして扱われることが多い」と指摘している通り、『古今集』から『後拾遺集』に至る勅撰集では、「ひぐらし」は全て秋の歌語として詠まれている。それのみならず、『古今集』直前の時期から『堀河百首』までの間の私家集・歌合・定数歌でも、次章に挙げる僅かな例外を除けば、「ひぐらし」はやはり秋のものとして詠まれている。

ひぐらしのなく秋山をこえくればことぞともなく物ぞ悲しき(『是貞親王家歌合』　一七)

秋のよに誰をまつとかひぐらしの夕暮ごとになきまさるらん(同　四一)

秋風のをぎの下葉を吹きみだるそらにみちつるひぐらしの声(『元真集』　六五)

八月ばかりの夕ぐれに

ひぐらしのなく夕暮ぞうかりけるいつもつきせぬ思ひなれども(『長能集』　三九)

山里は寂しかりける木がらしのふく夕暮の日ぐらしの声(『堀河百首』秋廿首　八二三)

上例の示しているように、少なくとも『古今集』直前から『堀河百首』の頃までは、「ひぐらし」は秋の歌語として認識されていた。

さらに、「ひぐらし」が秋の到来を告げるものであるという認識が存在する。それは『万葉集』巻十五の「ひぐらし」詠まで遡ることが出来る。

伊麻欲理波　安伎豆吉奴良之　安思比奇能　夜麻末都可気尓　日具良之奈伎奴

〈今よりは秋づきぬらしあしひきの山松陰にひぐらし鳴きぬ〉(『万葉集』巻十五　三六五五)(十二)

このような認識は、『拾遺集』時代まで続いている。

庭草にむらさめふりてひぐらしのなくこゑきけば秋はきにけり（『拾遺集』雑秋　一一一〇）

この歌は、『拾遺集』では人麻呂の作とされるが、実際には『万葉集』巻十の作者未詳歌の異伝歌と考えるのが妥当であろう。『万葉集』には、当該歌は、

庭草尓　村雨落而　蟋蟀之　鳴音聞者　秋付尓家里

〈庭草に村雨降りて蟋蟀の鳴く声聞けば秋づきにけり〉（『万葉集』巻十　二一六〇）

とある。『万葉集』において秋の到来を告げるものは「蟋蟀」だったが、『拾遺集』時代になると「ひぐらし」という異伝が生じたのである。もし『拾遺集』時代に「ひぐらし」が秋の歌語であるという共通認識がなかったとすれば、このような異伝は生じなかったであろう。

『万葉集』では夏・秋両方の歌語であった「ひぐらし」は、『古今集』以降、専ら秋の歌語となり、その状況は少なくとも『堀河百首』までは大して変化しなかった。後述するように数少ない異例も存在するが、「ひぐらし」がこの時代に基本的に秋の歌語であったことは動かない。

従って、「ひぐらし」がもとより秋のものであるという良経の判詞は、『古今集』時代から『堀河百首』までの間の「ひぐらし」の詠み方に裏付けられていることがわかる。

3　本章の結び

良経による「寒蝉自本秋天物」という判詞の背景には、詩語「寒蝉」と、三代集を中心とする時代における歌語「ひぐらし」とが、ともに秋の季節に詠まれるものであったという事実があることを確認した。良経が判詞にて詩語「寒蝉」の季節を用いて歌語「ひぐらし」の季節を説明するのは、「ひぐらし」が漢語では「寒蝉」にあたるという認識を和漢兼作の文人である彼が持っているからであろう。

二　主流となる夏のひぐらし詠
――丹後歌の背景――

本章では、丹後が「ひぐらし」を良経の認識とは違う季節で詠んだ背景を解明する。

1　夏の「ひぐらし」詠の復活：三代集時代の異例

前述したように、『万葉集』では夏に詠まれることもあった「ひぐらし」は、『古今集』時代から『堀河百首』までの和歌では概ね秋の歌語として詠われるようになる。しかしながら、『後撰集』時代には再び晩夏の歌語として詠まれた異例が見られる。

みなづきのつごもり、山でらなるに、ひとのせうそくに、このごろはなにごとかとあるに

たづねくる人なき夏の山ざとはながき日ぐらしかたみにぞなく（御所本三十六人家集本『能宣集』　一〇二）

六月をはり

いりひさしひぐらしのねをきくからにまだきねぶたき夏の夕暮（『好忠集』六月終はり　一八一）

ゆく道をあやなくまだきとまる哉ひぐらしのねは定めなきよを（同　一八三）

引用した三首の歌は、『後撰集』時代の歌人である能宣と好忠の作である。

能宣歌は、詞書によれば六月の晦日に詠まれており、夏の歌と言える。好忠の二首は、彼が四十歳の時に完成したとされる三百六十首（毎月集）の中の歌である。二首とも「六月をはり」の部に入っており、能宣歌と同様に、晩夏の歌である。

詞書から分かるように、能宣歌は題詠でなく実体験を詠んだものである。このように「ひぐらし」が夏に鳴くという現象の記録や描写は、ほかに『蜻蛉日記』上巻応和三年条・天禄元年五月～六月条、および『源氏物語』若菜下・幻にそれぞれ一箇所、合計四箇所見られる。和歌の世界では秋の歌語として定着していたとしても、実際の「ひぐらし」は夏の終わりから鳴きはじめることも当然あったはずで、これらの用例は、そうした事実をありのままに写したものと見てよい。

好忠歌の場合はこれらとは相違する。季節を明確に区切った定数歌という形式において、「六月をはり」の部に「ひぐらし」を詠んでいるのだから、客観的に自然現象を記録したというよりも、「ひぐらし」を夏の歌語として扱ったということになろう。好忠は、平安中期において異色な歌人と評価されてきた。彼が「異色」である理由の一つは、その歌風に『万葉集』の影響が見られることである（十三）。晩夏の歌語として「ひぐらし」を詠んでいる点にも、「ひぐらし」詠を夏部に収める『万葉集』の影響を考えることができるかもしれない。

ただし、本節に挙げた例のように、平安時代中期には夏の「ひぐらし」の例が和歌・散文ともに存在するとはいえ、「ひぐらし」が主として秋の歌語と認識されていることは動かない。

2　金葉集以降の「ひぐらし」詠

平安時代に晩夏の「ひぐらし」詠を詠み始めたのは能宣と好忠であるが、それを一般化させ、影響を広げたのは俊頼だと考えられる。

水風晩涼といへる事をよめる　　源俊頼朝臣

風ふけば蓮の浮き葉にたまこえて涼しくなりぬひぐらしの声（『金葉集』初度本　夏部　二一一・二度本　夏部　一四五・『散木奇歌集』夏部　三一二）

この歌は『金葉集』の初度本・二度本に入集している。柳澤氏の指摘した通り、「ひぐらし」詠は秋部に収録するという勅撰集の伝統が、ここに破られた。とはいえ、当該歌は『和歌一字抄』や『古来風体抄』にも収録されていることから、清輔や

俊成などの歌人によって高く評価されたことが分かる。晩夏の夕暮れに、風が吹き、水面に浮かんでいる蓮の葉の上の露も玉のように零れ、ひぐらしの鳴き声が聞こえ、秋のように涼しくなったという晩夏納涼の歌である。この歌では、俊頼は、従来秋の歌語であった「ひぐらし」を夏歌に詠み込み、秋のような涼しさを描写している。

これをはじめとして、『金葉集』以降、晩夏に「ひぐらし」を詠む歌の数は一気に増える。

なつのうたのなかに納涼を
ひぐらしの声する山の松陰にいはまをくぐる水ぞ涼しき
（『林下集』（実定）　八五・『月詣和歌集』六月　五二三）

夏
ならがしはする葉に夏や成りぬらん木かげ涼しきひぐらしの声（『正治初度百首』　惟明親王詠百首和歌　一三八）

夏
松陰の岩まをわくる水の音に涼しくかよふ日ぐらしの声
（『式子内親王集』　三三）

夏七首
しばゐする山松陰の夕涼み秋おもほゆる日ぐらしの声（『御室五十首』公継　一六八）

上例の四首は、いずれも「ひぐらし」の声によって晩夏における秋のような涼しさを詠う点で、俊頼歌と共通する。作者は何れも『金葉集』より後の歌人であり、こうした晩夏の「ひぐらし」詠の流行は、俊頼歌の影響下にある可能性が高い。

3　『新古今集』までの「ひぐらし」詠の傾向

『千載集』では、「ひぐらし」詠はそれぞれ夏部と秋部の両方に入っている。しかし、秋部に収められた二首の「ひぐらし」詠は、いずれも『千載集』当時の歌ではなく、時代の早い和泉式部と仲実の歌である。『千載集』の時代の「ひぐらし」詠の代表というべきなのは、夏部に入った当代歌人の慈円による一首である。

題しらず　　法印慈円
山かげやいはもるし水おとさえて夏のほかなるひぐらしの声（『千載和歌集』夏歌　二〇九）

この歌では、「ひぐらし」の声を「夏のほか」と思わせるものだと詠っている。このように、「ひぐらし」を夏と思えないほどの涼しさの表現として用いるのは、慈円にとって「ひぐらし」は本来的に秋の歌語であるからこそであろう。このような詠み方は同時代の式子内親王にも見られる。

夕さればならの下風袖過ぎて夏のほかなる日ぐらしの声
（『式子内親王集』　一三五）

このように、三代集時代には専ら秋に詠まれていた「ひぐらし」は、この時代になると、晩夏に秋のような涼しさを感じさせる歌語として詠まれる傾向が強まった。類似の例を掲げる。

右　松下晩涼　　公経

友さそふ片山陰の夕涼み松吹く風にひぐらしの声（『新宮撰歌合』　二四）

ひさぎおふる沖のこじまの浪の上に浦風さそふひぐらしの声（『千五百番歌合』夏三　四百六十二番　左　保季朝臣）

夕立の雲もとまらぬ夏の日のかたぶく山に日ぐらしのこゑ（『式子内親王集』　三一四）

公経歌は、題の「松下晩涼」と歌本文にある「夕すずみ」などの表現から、晩夏の納涼歌であることが明らかである。保季歌は海辺の景色を詠っており、「浪の上に浦風さそふ」の表現から、涼しさは想像しやすい。式子内親王の「夕立の」歌は、「夕立」の後の情景であり、「雲もとまらぬ」で風が暗示されていることからして、明示されてはいないが夏の夕方の涼しさを感じ取ることは可能であろう。

この時代の「ひぐらし」詠の傾向をより端的に知るためには、四季部を完備する歌合や定数歌がよい対象となる。それらの作品の各季節における「ひぐらし」詠の数と割合を計算した結果は以下のようになる。四季部に配置されていない歌は、「その他」に分類する。

この統計が示しているように、『新古今集』前後には、秋における「ひぐらし」詠の割合が減少し、夏における「ひぐらし」詠の割合が増加する傾向が顕著に見られる。この時期の歌壇では、晩夏に「ひぐらし」を詠むことが流行していたらしい。歌語「ひぐらし」は、秋に詠まれる歌語から、晩夏歌に詠まれる歌語に変化している。おそらくこのような傾向のあったことが、『千五百番歌合』の当該歌において、丹後がひぐらしを夏のものであるかのように詠んでいる原因の一つであろう。

表一

作品名	ひぐらし詠数	夏歌数	夏歌割合	秋歌数	秋歌割合	その他
六百番歌合	1	0	0%	1	100%	0
御室五十首	2	1	50%	1	50%	0
正治初度百首	7	3	43%	4	57%	0
正治後度百首	3	0	0%	0	0%	3
三百六十番歌合	2	1	50%	1	50%	0
千五百番歌合	10	9	90%	1	10%	0
建保名所百首	2	2	100%	0	0%	0

4　「ひぐらし」と「せみ」との混同

丹後が「ひぐらし」を夏の歌語であるかのように詠んだ理由は、上述の歌語「ひぐらし」の詠み方の変遷以外に、「せみ」と「ひぐらし」とが混同される傾向とも関係があると考えられる。

歌語「せみ」は「ひぐらし」と違い、主に夏に詠まれる歌材である。しかしながら、『新古今集』時代になると両者の詠み方は混同されはじめ、秋のような涼しさという、前述した「ひぐらし」の持つイメージが、蝉のほうに浸透していく現象が見られる。

建仁三（一二〇三）年六月に行われた『影供歌合』の歌題は、全て夏の題であり、その中に「雨後聞蝉」という題が存在する。題にある「雨後」に即して、雨後の涼しさを歌の主旨として詠んだ歌人もいる。前節で述べたように、晩夏の涼しさをイメージする歌語は本来「ひぐらし」であるが、歌合に出詠した歌人たちは、「ひぐらし」だけでなく「せみ」をも詠んでいる。その中から典型的な例を掲げる。

夕だちの雲のかへしの風すぎて涼しき露に蝉ぞなくなる
（六番　右　女房越前）

越前歌は雨上がりの夕方の涼しそうな場面を詠んでいる。越前は、「ひぐらし」ではなく「せみ」を用いた。

第一章で引用した柳澤氏の解説にもあったように、蝉の羽衣の薄さで夏場の涼しさを表現する技法は『古今集』時代から存在するが、蝉の声のほうはそれと全く違い、むしろ暑さを増すものであった。

なくせみのなかぬ木陰はなけれども深山隠れは涼しかりけり（『相模集』　三四八）

涼しさを尋ねきつれどせみの声きかぬ木陰のありがたきかな（同　二五〇）

右に挙げた『相模集』三四八番歌は、「蝉の鳴いていない木陰はないけれども山の奥は涼しい」の意で、蝉の鳴き声と涼しさとの間に逆接関係が読み取れる。二五〇番歌は、「涼しさを尋ねるために来たのに、蝉の声が聞こえない木陰はめったにない」の意で、同様の逆接関係が読み取れる。

また、蝉の声は暑さを増すものであると明言する歌は、顕季の母である藤原親子が主催した『従二位親子歌合』（一〇九一年）に見られる。

木の下の涼しき蔭を尋ぬるにあつさをそふるせみの声かな
（『従二位親子歌合』八番　蝉　右）

このように、少なくとも一一世紀末までは、蝉の声は暑さを増すものとして歌われていた。

しかしながら、『新古今集』の時代になると、晩夏の「ひぐらし」が盛んに詠まれるようになるのとほぼ同時期に、蝉の声が涼しさを表す歌語に変貌する。その最も早い例は『正治初度

百首』に確認できる。

鳴くせみのこゑも涼しき夕ぐれに秋をかけたる杜の下つゆ
（『正治初度百首』　一九三七）

従来暑さを増すものであった蝉の声が逆に涼しさを感じさせる歌語になる時期と、前述した「ひぐらし」が晩夏の歌語に変わる時期とが重なることは、「蝉の声」の詠み方の変化と「ひぐらし」の詠み方の変容との関連性を示唆している。

歌語「せみ」の詠み方が「ひぐらし」のイメージに接近すると同時に、「ひぐらし」と「せみ」との混同が発生したと考えられる。実は『新古今集』時代の歌論書にも、「ひぐらし」と「せみ」との混同を反映する証拠が残っている。

蝉
（中略）
なつせみ。
ひぐらし、同物也。秋ちかくなくはひぐらし也。（『八雲御抄』）（十四）

順徳天皇は『八雲御抄』で、「ひぐらし」を蝉と同じものであり、但し秋に近い時期つまり晩夏に鳴くのは「ひぐらし」であると述べている。『新古今集』時代には、「ひぐらし」と「せみ」とは「同物也」と認識した歌人が存在する。丹後も順徳天皇と同様の理解を持ち、「ひぐらし」を「せみ」と同様のイメージで捉え、ひぐらしを夏のものであるかのように詠んだ可能性は十分ある。

5　本章の結び

三代集時代には典型的な秋の歌語であった「ひぐらし」は、『新古今集』時代になると晩夏に詠まれる、秋の涼しさを感じさせる歌語へと変容した。そして、このような変容は歌語「せみ」の詠み方にも影響を与え、「せみ」と「ひぐらし」との詠まれる季節は混同され始めたと考えられる。以上の二点の要因により、丹後は「ひぐらし」を夏の歌語として「せみ」と等しいものと認識し、「夏のかぎりの日ぐらしの声」と詠ったのであろう。

三　判詞に見られる良経の和漢文学観

1　良経の「ひぐらし」詠に見られる詩語と歌語の季節の統一

以上に論じたように、三代集時代には秋の歌語であった「ひぐらし」は、『新古今集』時代には、晩夏に詠まれることが主流になった。そうであれば、「ひぐらし」を秋の歌語であると主張する良経の考えは些か時代の流れに逆らうように見える。では、このような時代にあって「寒蝉自本秋天物」と述べた良経自身は、「ひぐらし」詠をどのように詠んでいるのであろうか。

良経の「ひぐらし」詠の特徴を明らかにするために、『千載集』・『新古今集』時代の歌人による「ひぐらし」詠を調査した。

以下の表は、この時代の歌人を「ひぐらし」詠の歌数の多い順で配列し、「ひぐらし」をどの季節に詠んでいるか、数値と割合を示したものである。但し「ひぐらし」詠が一首しか残っていない歌人は省いた。

良経による「ひぐらし」詠は九首もあり、慈円と並び、数が最も多い。そしてその中の秋歌の割合は七八％にも達し、寂蓮以外の歌人よりかなり高い。このような結果は、良経が「ひぐらし」を秋の歌語であると認識していたことの裏づけになる。それに対して、丹後による「ひぐらし」詠は二首とも夏歌であり、彼女が「ひぐらし」を夏の歌語であると理解していたことを示している。

表二

歌人	ひぐらし詠数	夏歌数	夏歌割合	秋歌数	秋歌割合	その他
良経	9	2	22%	7	78%	0
慈円	9	6	67%	3	33%	0
式子内親王	4	3	75%	1	25%	0
経家	4	2	50%	2	50%	0
定家	4	1	25%	2	50%	1
有家	3	2	67%	1	33%	0
寂蓮	2	0	0%	2	100%	0
実定	2	1	50%	0	0%	1
西行	2	0	0%	1	50%	1
季保	2	0	0%	0	0%	2
丹後	2	2	100%	0	0%	0

次に、良経の歌を具体的に見ることにより、歌語「ひぐらし」に対する良経の考え方を探る。

みな人は蝉の羽衣ぬぎすてて今は秋なる日ぐらしの声（『秋篠月清集』十題百首　二七五）

この歌の歌意は、「人々はみな蝉の羽のような夏の薄い衣を脱ぎ捨てて、今や秋となり、その季節の到来を告げる『ひぐらし』が鳴いている」というものである。この歌は建久二（一一九一）年閏一二月四日に披講されたものであり、千五百番歌合の判詞より凡そ一一年前の作であるが、この歌の主旨は、「寒蝉自本秋天物」という判詞の主張と如何にも合致する。従って、良経は早い時期から既に「ひぐらし」を秋の歌語だと認識していたことが窺える。

勿論、時代の流行の影響を受けて、良経も晩夏詠で「ひぐらし」を使うことがある。しかしながら、その場合はいずれも「ひぐらし」を秋を思わせる歌語として使っている。

夏十首

ははそはら時雨ぬほどの秋なれや夕露涼し日ぐらしのこゑ（『秋篠月清集』南海漁父百首　五二三）

夏十五首

ひぐらしのなくねに風をふきそへて夕日涼しきをかのべの松（同　院第二度百首（千五百番歌合）　八三二）

良経による夏の「ひぐらし」詠は上例の二首しか存在しない。建久五（一一九四）年に詠まれた五二三番歌では、夏の夕方、「ひぐらし」の声を聞くと秋かと疑われると詠む。問題の判詞と同じ『千五百番歌合』の詠作である八三二番歌も同様に、「ひぐらし」の声を（秋のような）涼しさをイメージさせる歌語として用いている。

以上述べたように、良経は、同時代の流行とは一線を画し、「ひぐらし」を基本的に秋の歌に用いるばかりでなく、夏の歌に用いる僅かな例においても、あくまで秋のような涼しさを思わせる歌語として用いている。「寒蝉自本秋天物」という主張を、実作においても実践しているといえよう。

前章の第二・三節で論じたように、晩夏の「ひぐらし」を秋の涼しさをイメージさせるものとして詠むことは『新古今集』時代の多くの歌人に共通していた。その詠み方は「寒蝉自本秋天物」という認識を持っている良経にもかろうじて許容されたのであろうが、「ひぐらし」を夏のみのものであるかと思わせる丹後詠はその詠み方からも逸脱しているため批判対象になったと推測できる。

このような彼の主張は、丹後歌以外の歌に与えた判詞からも窺われる。良経が加判した『千五百番歌合』歌の中で、「ひぐらし」を詠むものは一〇首ある。その中で勝とされたのは僅か二首である。そのうちの一首は、『千五百番歌合』では唯一秋部にある「ひぐらし」詠である。もう一首は次に掲げる夏歌の四七五番である。

四百七十五番

左　隆信朝臣

かきくらすとばかり見ゆる夕立にいづれのさとかあさぢふの露

右勝　通具朝臣

わすれては秋かとぞ思ふ風わたるみねよりにしの日ぐらしの声

雷雨不知何処過　待秋只翫嶺蝉嘈

良経の判詞は、「雷雨が何処を通り過ぎたかは知らないけれど」と左歌を軽視した上で、「秋を待ってただ嶺の蝉の声を翫ぶべきだ」と述べ、通具歌を勝としている。通具歌は、傍線部の示しているように、今は夏であることをつい忘れて秋ではないかと思うほどの風が吹き渡っているという情景を詠んでいる。まるで秋のような雰囲気の歌だからこそ、良経は「ひぐらし」も相応しいと考えて判詞で褒めたと推測できる。

本節の考察を踏まえて、『新古今集』時代の歌人である良経は、加判する場合のみではなく、自ら歌を詠む際にも、「ひぐらし」を秋の物として詠んでいた。良経が「ひぐらし」に関して当時の流行とは一線を画する姿勢をとっていることが確認できた。

ここで良経のこのような姿勢の理由について推測すると、三代集時代の歌語「ひぐらし」の伝統を尊重したためという考えが第一に浮かぶが、一方、次節に論じる雁歌の示すように、良

経が常に和歌の伝統を墨守する歌人だとは考えられない。そうであれば、彼の実際の意図は、恐らく和歌の伝統の尊重ではなく、また別にある。

和漢兼作の文人である良経は、『千五百番歌合』で漢詩形式の判詞を施すにあたって、夏三の冒頭に漢文の序文を記している。その中で良経は、歌と詩とを交互に配列する形の正当性を求めて、同じように漢詩と和歌とを交互に配列する形を持つ前例を捜し、『新撰万葉集』と『大江千里集』という二つの文献を挙げながら、「蓋和漢詞、同類相求之故也（蓋し和漢の詞は、同類相ひ求むる故也）」と、歌と詩とは同類のものであるとまで主張している。詩語と歌語とが同類の物であるならば、その詠まれる季節も一致するとまで考えてもおかしくはない。

第一章に述べたように、良経は漢語「寒蝉」を用いて歌語「ひぐらし」を判じている。このような営みは、三代集時代の歌語「ひぐらし」の伝統のみを加判の時の根拠にしたわけではなく、詩語「寒蝉」の季節をも歌語の季節の判断基準としているように見える。おそらく彼は、詩語と歌語との季節が統一するものであると考えたからこそ、詩語の季節をも判詞の根拠にしたであろう。

そして、良経が時代の流れに逆らって、歌語「ひぐらし」を秋のものとした姿勢も、詩語「寒蝉」の季節との統一を守ろうとするためだったという可能性が浮かんでくる。

2　詩語「雁」と歌語「かり」との季節の統一

上述の歌語と詩語との季節の統一は、また彼の詩語「雁」と歌語「かり」とに対する理解からも窺うことができる。

四百八十六番

左　季能卿

風わたるならのはかぜのあらましにながむる空の初雁のこゑ

右勝　丹後

まちもせずをしみもあへぬ夏の夜は山のはうとき月をこそみれ

夏天新雁乖時令　縦観未来声豈聞（『千五百番歌合』夏三）

四八六番左歌では、季能は晩夏の歌で秋の歌語「初雁」（十五）を用いている。晩夏の歌に「初雁」を詠む意図は、秋の到来を暗示するためと推測できる。しかし、型破りと評して良いこの試みは、良経によって「夏天の新雁時令に乖く」と酷評されている。良経にとっては、「初雁」或いは「新雁」を夏に詠むことは時令に合わない。

『歌ことば歌枕大辞典』で村尾誠一氏の指摘するように、和歌では、「初雁は、秋の到来を告げるのではなく、秋の深まりを告げる景物である」。秋の深まりを告げる「初雁」を晩夏六月の景物として詠むのは、確かに季節的に違和感のある表現だと言える。

また、漢詩の世界でも、詩語「新雁」・「初雁」は春秋の景物として詠まれるものであり、夏に詠まれる用例は一例も見当たらない。

暮天新雁起汀洲、紅蓼花疎水国秋。（『杜荀鶴文集』巻三「題新雁」）（十六）

芝田初雁去、綺樹未鶯来。（『初学記』巻三　歳時部上所引唐太宗「首春詩」）（十七）

晩燕吟風還、新雁拂露驚。（『懐風藻』正五位下肥後守道公首名「五言秋宴」　四九）

観落葉、断人腸、淮南木葉新雁翔。（『文華秀麗集』巻下「神泉苑九日落葉篇」　一三六）

上例の示しているように、良経が季能歌を批判する根拠は明らかである。「初雁」或いは「新雁」は、和歌と漢詩いずれでも夏に詠まれない景物である。良経の判詞は、このような事実を踏まえていると考えられる。

続いて、『千五百番歌合』で良経自身が詠んだ、初冬の雁歌に注目する。

霜うづむかりたのこのはふみしだきむれゐる雁も秋をこふらし（『千五百番歌合』冬一　八百七十二番　左・『秋篠月清集』院二度百首　冬十五首）

谷知子氏は、この歌の本歌を「夏刈りの玉江の蘆を踏みしだき群れゐる鳥の立つ空ぞなき」（『後拾遺集』巻三　夏　二一九『古今和歌六帖』第六　つる　四三三四）と指摘している（十八）。

『古今和歌六帖』の部立から、本歌における「鳥」は「鶴」を指すことが分かる。良経歌では、季節を本歌の夏から冬に変えた上で、本歌にある「蘆」は「霜うづむかりたのこのは」に変えられ、同じく「鳥」は「雁」に変えられている。「霜」・「刈田」などは冬の常套の歌語であるため問題ないが、冬に「かり」を詠むのは和歌では一般的ではなく、八代集の範囲では「たまづさに涙のかかる心ちしてしぐるる空に雁のなくなる」（『千載集』巻六　冬歌　四一五　読人知らず）の一首しか存在しないため、注目される。

千載歌と良経歌の関係を考えると、俊成の編纂した勅撰集に入集した歌が弟子である良経の詠作に影響を与えた可能性はあるとはいえ、二首の歌の類似性は冬の雁を詠むこと以外にはほぼ存在しない。従って、千載歌から良経歌への影響は特にないと考えるほうが穏当である。良経が冬に雁を詠む根拠は別にあると考えられる。良経歌の情景は、『万葉集』にある「秋の田のわがかりばかのすぎぬれば雁金聞こゆ冬かたまけて」（巻十　秋雑歌　二一三三）と似たところがあるが、万葉歌の季節は初冬ではなく、「冬かたまけて」とあるように、冬が近い晩秋の頃である。良経歌とは微妙に相違するため、この万葉歌が良経歌における冬の「かり」の根拠になったとは考えにくい。

『千五百番歌合』の当該歌に対する定家の判詞には、

かりたのこのはふみしだきとおき秋をこふらしなど侍る、心詞たくみにおよびがたくきこえて、きらきらしくをかしきかたも侍るにや（後略）

とある。ここでは歌の第二句・第三句及び第五句を讃え、冬の「かり」を詠む第四句については何も言及していない。それは、定家にとって冬歌にて「かり」を詠むことは、それほど肯定すべき詠み方ではなかったからであろう。

良経が冬に「かり」を詠んだことも、詩語と歌語の季節に統一性を求めた結果だと考えられる。冬に「かり」を詠むことは、和歌では珍しいが、漢詩では普通のことである。

南窓背燈坐、風霰暗紛紛、寂寞深村夜、残雁雪中聞（『白氏文集』巻六「村雪夜坐」）

九江十年冬大雪、江水生氷樹枝析。百鳥無食東西飛、中有旅雁声最飢、雪中啄草氷上宿、翅冷騰空飛動遅、（後略）（同巻十二「放旅雁元和十年冬作」）

旅雁一行江霧透、寒猿三叫峡雲深。（『本朝無題詩』巻七・河辺「初冬遊泛西河」藤原明衡）

蕭條秋後心尤苦、旅雁驚夢猿断腸。（同　巻十・山寺下「冬日雲林院即事」中原広俊）（十九）

上例の示しているように、漢詩では、雁は春秋以外に、冬の景物としても詠まれる。この点は、和歌における歌語「かり」が基本的に春秋にしか詠まれないことと相違する。良経が、従来和歌ではほとんど詠まれない冬の「かり」を詠んだ根拠は、漢詩における詩語「雁」の季節にあろう。良経による初冬の雁歌からも、前述したような、彼の持っていた詩語と歌語との季節の統一性に対する考え方を窺うことができる。

3　本章の結び

夏の「初雁」と冬の「かり」と、これらはいずれも和歌の伝統に背く詠み方のように見える。しかし、良経がそれぞれに対して異なる態度を示すのは、彼が歌語の季節を判断する時に、和歌の伝統のみでなく、詩語と歌語との季節の統一という独自の基準を用いていたからであろう。

終わりに

良経は漢詩を先に学習し、後に和歌にも詳しくなった和漢兼作歌人である（二十）。彼の歌に見られる漢詩文摂取は、これまでに詳しく指摘されてきた（二十一）。良経が和歌に漢詩表現を積極的に取り入れる営みは、定家のように文治・建久期に活発化して正治・建仁期に激減した（二十二）わけではなく、『千五百番歌合』の成立した建仁期まで存在しつづける（二十三）。それだけでなく、正治・建仁期には、良経の詩歌合に対する関心の高まることも指摘されている（二十四）。詩歌合への関心と『千五百番歌合』における漢詩判詞という一連の営みから、漢詩と和歌とを結び付けようとする良経の意志が顕著に窺える。このような活動の意図について、寺田純子氏は、「一般的には宮中御会のものとみなされていた漢詩を和歌と同列の場に持ち込み、詩と歌と常にコンビのものとして扱うことによって、後鳥羽院仙洞御所の歌

合行事に対抗し得る摂関家の文化事業としての詩歌合わせの存在を強く打ち出していこうとしたのである」と推測した(二十五)。

「後鳥羽院仙洞御所の歌合行事に対抗し得る」とまで言えるかどうかはともかく、少なくとも、建仁期に、詩と歌とを並列させようとする意志が、良経の中でこれまで以上に強くなっていたことは間違いない。

また前述のように、良経は、『千五百番歌合』における漢文の序文で歌と詩とは同類のものであるとまで主張している。たしかに、良経の和歌に限って言えば、歌は詩の同類だと見做してよいかもしれない。小山順子氏の指摘している(二十六)ように、『千五百番歌合』より凡そ五年前に、建久の政変によって蟄居していた良経は、漢文学における「漁父」・「浮雲」などの詩語を「西洞隠士百首」で使い、それらの詩語が持つ政治批判性をも同時に和歌に取り入れたことがある。小山氏の論じたように、このような政治批判性を持つ歌は、本来漢詩しか持っていない文章経国の意識を和歌に取り入れ、「和歌と漢詩という異なる形態の文学を融合しようとする良経の模索の一端」であると評してよい。

そして、本稿にて検討した判詞でも、良経は歌語の季節を判断する時に詩語をその根拠としたと言える。このような方針は歌語と詩語との間に統一性を求める営みであり、和歌と漢詩という異なる形態の文学を融合しようとする良経の模索の一環であろう。

和漢兼作の詩歌人である良経は、建久元年に制作した「二夜百首」から本格的に漢詩文摂取に取り組みはじめ、その後の蟄居期に漢詩の政治批判性を和歌に取り入れるという試みを経て、正治・建仁期の政界への復帰の後に、和歌と漢詩とは同類のものであるという和漢文学観を直ちに露わにしている。

和漢兼作の歌人は『万葉集』時代より既に存在するが、歌は詩の同類であるとはじめて主張した歌人は良経である。この事実から考えれば、和歌史上においては、良経の性格はこれまでの歌人と一線を画しており、画期的な存在と言える。

また、良経が上皇の召した史上最大の規模をもつ歌合という公的な場で、「詩歌同類」の思想を判詞の序に書き込み、そして漢詩の形をもつ判詞を作ることでその思想を実践した狙いは、「詩歌同類」という和漢文学観を公的に認めさせることであろう。

[注]

(一)『千五百番歌合』の引用は『千五百番歌合の校本とその研究』(有吉保　風間書房　一九六八)によりつつ、濁点を私意によって付ける。漢詩の訓読は私意による。
また、本稿における和歌及び『和漢朗詠集』における漢詩文の引用は、特に断らないかぎり、全て『新編国歌大観』(角川書店　一九八三～一九九二)によりつつ、理解の便宜のため、仮名を適宜漢字に改める。

(二) 他系統の『金槐集』では当該箇所の本文が異なるため、「寒蝉」の語は見られない。

(三) 衣手のもりの下風吹きかへてさむき蝉なくあきはきにけり(『洞院摂政家百首』上　秋　五六六　頼氏)

(四)「釈曰：此辨蝉之大小及方言不同之名也。」引用は『十三経注疏　二〇・爾雅注疏下』(国立編訳館　二〇〇一)による。

（五）享和本の本文である。天治本の本文は「蜩、世比」とある。引用は、京都大学文学部国語学国文学研究室編『新撰字鏡：天治本：附享和本・群書類従本　増訂版』（臨川書店　一九七九）による。
（六）引用は、京都大学文学部国語国文研究室編『諸本集成倭名類聚抄』（臨川書店　一九六八）所収「箋注和名類聚抄」による。
（七）元亀二年京大本『運歩色葉集』三・五九・表・六行目
（八）引用は『中華叢書　十三經注疏十　禮記注疏（上）』（新文豊出版　二〇〇一）による。
（九）引用は『白居易集箋校』（上海古籍出版社　一九八八）・『文選』（中華書局　一九七七）によりつつ、字体は通行字体に改める。
（十）日本漢詩の引用は『群書類従』第八輯・第九輯（続群書類従完成会　一九五九～一九六〇）による。
（十一）『歌ことば歌枕大辞典』（久保田淳・馬場あき子編　角川書店　一九九九）蜩条　柳澤良一氏担当箇所
（十二）訓読は『新編国歌大観』によりつつ、理解の便宜のため、仮名を適宜漢字に改める。
（十三）滝沢貞夫「曽祢好忠試論」『言語と文芸』一九六八年　巻一〇　五九号
神作光一『曽祢好忠の研究』（笠間書院　一九七四）一一八～一二〇頁
筑紫平安文学会『好忠百首全釈』（風間書房　二〇一八）二八〇～三〇五頁
（十四）『日本歌学大系　別巻三』四五三・三二九頁による。
（十五）注十一『歌ことば歌枕大辞典』初雁条　村尾誠一氏担当箇所
（十六）引用は『杜荀鶴文集』（上海古籍出版社　一九八〇）によりつつ、字体を通用字体に改める。
（十七）引用は『初学記』（中文出版社　一九七八）によりつつ、字体を通用字体に改める。
（十八）『和歌文学大系六十　秋篠月清集・明恵上人歌集』（谷知子　平野多恵　明治書院　二〇一三）
（十九）『本朝無題詩』の引用は、『本朝無題詩全注釈』（本間洋一　新典社　一九九二～一九九四）による。
（二十）久保田淳『新古今歌人の研究』（東京大学出版会　一九七三）四九四～五〇五頁
（二十一）大野順子「藤原良経の『花月百首』について――初学期における本歌取りの状況を中心として」『古代文化』二〇〇五　五七巻　七号
小山順子「藤原良経の漢詩文摂取――初学期から『二夜百首』へ」『国語国文』二〇〇五　七四巻　九号
同「藤原良経『六百番歌合』恋歌における漢詩文摂取」『和歌文学研究』二〇〇四　巻八九　一二号
同「藤原良経『西洞隠士百首』考――四季歌の漢詩文摂取を中心に――」（『人文知の新たな総合に向けて』第二回報告書Ⅳ［文学篇1論文］二〇〇四）
同「藤原良経『正治初度百首』考：漢詩文摂取の方法をめぐって」『山邊道：国文学研究誌』二〇〇八　巻五一
（二十二）長谷完治「漢詩文と定家の和歌」『語文（大阪大学）』一九六六　巻二六　七号
富樫よう子「藤原定家における漢詩文摂取――文治建久期を中心に――」『国文目白』一九八三　巻二二　三号
（二十三）注二十一　小山論文「藤原良経『正治初度百首』考：漢詩

文摂取の方法をめぐって」

注十八『秋篠月清集』八〇一・八〇七・八四七・八五三・八九二番歌注釈（谷知子担当箇所）

（二十四）寺田純子「正治・建仁期の藤原良経」『国文学研究』一九七二　巻四八

（二十五）注二十四に同じ

（二十六）注二十一　小山論文「藤原良経『西洞隠士百首』考――四季歌の漢詩文摂取を中心に――」

［附記］

本稿は、日本学術振興会特別研究員奨励費補助事業（「和漢兼作の作品集の構造に関する研究」18J12738）の成果の一つである。

（こう　いってい・本学大学院文学研究科博士後期課程、日本学術振興会特別研究員）